万行寺寺報

Mangyoji Jiho

発行
浄土真宗本願寺派 万行寺
住職　山﨑信充
〒385-0003
長野県佐久市下平尾４６１－１
電話　0267-67-2460

2024（令和6）年
仏暦2567年
11月号
（第158号）

実践運動 総合テーマ『そっとつながる ホッがつたわる～結ぶ絆から、広がるご縁へ～』

法話 住職

よきひと（善知識）の仰せ

正信念仏偈に学ぶ

印度西天之論家
中夏日域之高僧

印度西天の論家、中夏・日域の高僧、

「現代語訳」
インドの菩薩方や中国と日本の高僧方が、

お釈迦さまの『無量寿経』というお経に依るところを述べた「依経段」が終わり、ここからは、そのお経の教えを受け継がれた七人の高僧（七高僧）の釈に依るところを述べた「依釈段」が始まります。

七高僧を順にあげていきますと、まず「印度西天の論家」といわれるインドの菩薩で、**龍樹菩薩**、**天親菩薩**の二人です。そして、中華はかつて「中夏」と書いた時代があり中国のことを指し、**曇鸞大師**、**道綽禅師**、**善導大師**の三人です。そして、日本の異称「日域」では、**源信和尚**、**源空聖人**の二人です。

最後の源空聖人は、浄土宗を開かれた法然上人のことです。このように、仏教発祥のインドから中国へ伝わり、さらに日本に渡り、浄土の教えをこの私につなげて頂いた七人の高僧方を、これから親鸞さまは一人ひとり讃えられていくのです。

ところで、仏教というと、師弟関係があります。しかし、親鸞さまは「弟子一人ももたず」と『歎異抄』に言われています。同じく『歎異抄』に、親鸞さまは「よきひとの仰せ」と、特に法然上人を深く尊敬をされました。それは、弟子を持つという互いを縛り付けるものではなく、よき師を持つということを示されたのです。

いわゆる〝師弟〟を重視する社会が他にもありますが、驕り高ぶりをもって師であるとあれこれ主張しても、弟子には何も伝わりません。師になる前の、尊敬できる師の存在があるからこそ関係性が保たれていくのです。

親鸞さまが、この『正信念仏偈』の後半「依釈段」において、七人の高僧方をはじめ念仏の祖師方を讃えられるのは、私をこのような行者にしていただいたと慶びにあふれたお心によるものだということです。

特に、浄土真宗では、念仏するもの皆が仏さまの弟子という意味で〝仏弟子〟という表現があります。念仏によって皆が等しく救われていく同朋（なかま）であるということです。

私にも〝師〟と呼べる方がいると、以前の寺報の法話にお伝えしました。今は亡き師のお姿やお言葉が、今の私にとって大切なものになっています。容易く出会えるものではありませんが、尊敬できる師を持つということは人生の力になります。

次回からは、お釈迦さまの本意が、七高僧によって、どのように明らかにされていったのか詳しく示されていくところになります。

浄土真宗 ㊕仏事のイロハ

四、法要・行事 ―仏縁を深めよう―

【仏前結婚式】 仏式の結婚式をあげよう

仏事の本で「結婚式」を取り上げると、人によっては違和感を覚える方があるかもしれません。しかし、結婚式も仏前で行えば、りっぱな〝仏事〟なのです。

どうも〝仏事〟と言えば、葬式とか年忌法要の印象が強くて、実際この本でも、それらに多くのスペースを割いてきたわけですが、赤ちゃんの初参式や、仏前結婚式がもっとさかんになり、仏事のイメージが変わってくれることを望みます。

それはさておき、日本では神前の結婚式が多かったのですが、最近はキリスト教式や、人前結婚式、また、旅先などで二人だけの式をあげて、後から皆に報告するという二人勝手型の結婚式も目立ってきました。しかし、仏式は残念ながら、依然としてごく限られた少数派でしょう。もっとも、神式にしろキリスト教式にしろ、宗教的信念に基づいて行っているのかと言えば、必ずしもそうではなさそうです。つまり「どこぞの神社の祭神である○○神を信仰しているから神式で行う」という方はまれでしょうし、キリスト教の信者でない人がいくらでも教会で式を挙げ、神に誓ったりしています。

極端な言い方かもしれませんが、結局、結婚するための〝形づくり〟としての式ではないかと思います。式の形態が持つ印象とか雰囲気が重視され、肝心の宗教的内容や宗教的尊厳性は希薄になりがちなのです。

しかし、結婚式というのは、縁あってめぐりあい結ばれた二人が、新たな人生を歩む出発点となる大切な儀式です。単なる感覚的な印象や雰囲気ではなく、二人の人生の依りどころとなるしっかりとした精神的基盤のもとに執り行うのがよいのではないでしょうか。

仏前結婚式は、そうした二人の人生の共通の依りどころとなってくださる仏さまの尊前で、敬愛和合の日暮らしを誓い合うものです。式はお寺や本山、別院、また一部のホテルでも行うことができます。けっこう厳かで、二人の思い出に印象深く残ることでしょう。

なお、式の日取りで「大安」や「仏滅」を気にしてはいけません。

「浄土真宗 ㊕仏事のイロハ」末本弘然著／本願寺出版社刊より」

年忌法要表

1周忌	2023(令和 5)年	**23回忌**	2002(平成14)年
3回忌	2022(令和 4)年	**25回忌**	2000(平成12)年
7回忌	2018(平成30)年	**27回忌**	1998(平成10)年
13回忌	2012(平成24)年	**33回忌**	1992(平成 4)年
17回忌	2008(平成20)年	**50回忌**	1975(昭和50)年

編集後記

秋らしさなど感じられない日々から、一気に冬になってしまったような感じです。体調、崩していませんか？◆『正信念仏偈』の後半が始まったと言っていますが、連載五年間のうち次号で二年分が終わるところで、まだ半分にもなっていません。もう少しと言える日が待ち遠しく、悩みながら発行を続けています。